HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	アート実践の解放プロセス ： 日常との関わりで生まれる「問い」に注目して
Author(s)	木村, 花菜
Citation	社会教育研究, 34, 9-24
Issue Date	2016-06-15
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/62296
Type	departmental bulletin paper
File Information	09_kimura.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

アート実践の解放プロセス
～日常との関わりで生まれる「問い」に注目して～

木　村　花　菜*

目　　次

１．はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
（１）問題の所在・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
（２）矛盾点に注目・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
２．課題・・12
３．方法・・13
４．ココルーム実践の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
５．アート実践の形成過程・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14
（１）立ち上げの経緯：アートに何ができるのか（～2002 年）・・・・・・・・・・・・・・・・・15
（２）FG での日々：アートの力を問うていた（2003 年～）・・・・・・・・・・・・・・・・・15
（３）釜ヶ崎での日々：多様な他者と交通する場づくり（2008 年～）・・・・・・・・・・・・・16
６．結論・・17
（１）解放のプロセス・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・19
（２）「解放のプロセス」を支えた条件・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・20
（３）おわりに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・22
注・・・22
参考文献・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・23

１．はじめに

（１）問題の所在

本研究は、アートを媒介にして、日常の生活現実そのものを創り変えるようなアート実践[1)]の展開論理を解明することを目的としている。

---

*博士後期課程３年

近年、アートプロジェクトの動向は、場所の固有性に注目し、そこにある資源と結びつくことにこだわった表現へとシフトしているように見受けられる。「アートを社会化する」、つまりアートの力を社会に活かしていくことを試みる際に、地域から出発して、アートを介して地域を変容させる実践が数多く展開されていると言える[2)]。しかしそこでは、アートの持つ非日常性と地域の日常（生活世界）が出会った時に反発が生じることもしばしばある。毒のある正直さや敏感さで日常や社会を揺さぶり「こじ開け、狂わせることを企む」行為であるアート[鷲田 2012：154]は、地域の慣習や文脈とは異なったそれらを揺るがすような価値観を持ち込むため、地域との分断を生み出すこともあるためだ。

このように、アートと地域が持つそれぞれの特性の違いを考慮すれば、反発が生じることは必然であるにも関わらず、地域社会がアートをあまりにも容易に抵抗なく受け入れていると捉えたり、性急に「根づいている」と見なしてしまうなど、これまで評価側が短絡的な見方をしていた部分があったと言える。たとえば、白川は「アートという枠組みは、作家の知名度と共振して、かえって強化され」、その場所に潜む固有の問題や実情に焦点をあてることもなく、「アートということでうまく問題を回避してしまった」として、アートプロジェクトがすでに決められた紋切型の方法で展開されてきた側面を指摘する[2005：109]。このような問題を回避するためには、アート実践を数的な結果や経済的な効果だけで評価するのではなく、生成の過程で生じる質的な変容を丁寧に捉えて分析してゆく必要がある。

（２）矛盾点に注目

ここで、実践が深まりながら展開してゆく際に重要になるのが、地域社会の日常性とアートの非日常性が出会う場面における、「矛盾」した状態をどう乗り越えてゆくのかという点である。日常とは、生活に潜み、そこに埋もれた価値観を含む習慣化された認識や物事である。一方、非日常は、異質性をもつもの、日常を脅かすもの、規範的なものさしから外れている状態であると言えるが、活動理論の研究者である Y・エンゲストロームは次のように述べ、活動が拡張的に発展するための契機としての矛盾の存在を指摘している［Engestrom 1999：141］。

> 学習活動の本質は、当該の活動の先行形態のなかに潜在している内的矛盾を露呈しているいくつかの行為から、客観的かつ文化–歴史的に社会的な新しい活動の構造（新しい対象、新しい道具、などを含む）を生産することである。学習活動とは、いくつかの行為群からひとつの新たな活動への拡張を習得することである。・・・学習活動は、活動を生産する活動である。

つまり、実践とは矛盾（行き詰まり）を乗り越えることの連続であると言える。したがって、分析する際のポイントは、その矛盾の解決の場面にあると考える。ここで注目する矛盾とは、実践者（アーティスト）側がアート実践を展開させてゆくにあたり、地域社会の日常と関わろうとするなかで生まれる対立のことを意味し、本論ではそこに向き合おうとするが故に生じる「問い」に焦点

を当てる。一方で、地域社会側が非日常であるアートを受け入れる際に生じる対立に注目することも重要であるが、それはまた別稿を用意したい。

ここで、地域社会の日常とぶつかる際の「きわどさ」と十分に向き合おうとしているアート実践は、地域社会と関わっていく中で、アートそのものの捉え方を変化させたり、際立たせたり、偶然性を担保しながら実験的に展開されてゆくものだと考える。したがって分析の際には、アートと日常が接する場面、とくに日常の文脈に取り込まれてしまわないように「従いつつ、それを何処かで裏切」るような振る舞い[白川 2005：140]に注目する必要がある。このように、アート実践そのものが抱える矛盾を乗り越え、行き詰まりから解放されてゆくというプロセスを積み重ね、実践が持続的に展開してゆける条件を探りたい。

２．課題

以上から本稿では、地域社会と関わるアート実践の展開プロセスを時系列的に整理し、次のような点に応えることを課題とする。第一に、アート実践が日常との対立による行き詰まりをどのように解決しようとしたのか、実践の展開論理を明らかにすることである。第二に、アートが社会と関わる際の手法の特徴を明らかにし、地域の日常／システムとアートが関係を築いてゆく際の態度や実践のあり方に関して示唆する点を述べる。

３．方法

その課題を解くための方法として注目するのは、大阪市西成区（通称・釜ヶ崎）で活動するアートNPO法人 こえとことばとこころの部屋（以下「ココルーム」）の実践である。ココルームは、その釜ヶ崎で「カフェのふり」をしながら[上田・植田 2014：1]アートという表現活動を通して、「しんどさ」を抱える人々のエンパワメントを支える活動をしている。本稿では、ココルームが社会的なアート実践を展開していくにあたって向き合わざるを得ない日常／社会システムの現実とアートとの往来で生まれる、アートの機能の変化に注目して分析を行う。とりわけ、実践者側が抱える「とまどい」に注目しながら展開のプロセスとそれを支える条件を探ってゆきたい。代表で詩人の上田假奈代は、「アートは問いを問い続けること」だと言うが[藤ら 2012：73]、その「問い」が問われてきた場面、つまりは問わざるを得ない状況＝「矛盾」の場面に焦点を当てていく。

なお分析は、代表の上田及びスタッフUへのインタビュー（ともに2012年8月20日～26日に実施）、出版物からの引用を元に行った。

４．ココルーム実践の概要

釜ヶ崎は、日雇い労働者やホームレスの多く暮らす日本最大のドヤ街で、「極度のこま切れ就労状態」および、「家族・社会的諸集団どころか、自分の過去を含め、いっさいのつながりを断ち切った（断ち切られた）極度の無縁状態」を余儀なくされている労働者が集住している地域である[ありむら 2011：86]。ココルームは、この釜ヶ崎でアートを通して地域に暮らす野宿経験者や生活保護受給者、若者やアーティストらのエンパワメントを支える実践を展開している。そこには、毎日開かれ、誰でも出入り自由で、ふらっと立ち止まれる場としてのカフェやメディアセンター[3)]があり、そこに広がる言葉、音、色、映像などが創るアート空間は、釜ヶ崎に集う多様な人々を受け入れ、普段は関わり合うことのない人々との異質な出会いを生み出している。活動がスタートした 2003 年から５年間は、環状線を挟んで隣の浪速区・新世界のフェスティバルゲート（以下、FG）に拠点を持ち、2008 年から現在の場所・釜ヶ崎にて活動を続け、2014 年のヨコハマトリエンナーレでは「釜ヶ崎芸術大学 [4)]」として参加した。

５．アート実践の形成過程

（１）立ち上げの経緯：アートに何ができるのか（～2002 年）

【生きづらさの自覚】

①詩は役立たずだった

活動を始める以前に上田は、「詩人は役立たず。社会が怖かった」というように「生きづらさ」を抱えていた。その生きづらさは、現代社会に広がる強固な規範意識の中で、近年多くの人が抱える苦しさでもあるが、とりわけ、アートに携わる人々にとっては深刻な課題であった。

アーティストの仕事は、社会のあらゆる事象やその背景にある価値観に対して敏感になることでもあり、多くの人々が気にかけることなく見過ごしている社会の事実に対しても、ことさら深く向き合わければならない。そしてその物事に対する深い洞察力や積み重ねられた対話を通して表現が生み出される。しかし「働く」という面から見てみると、彼らの中には、学校教育を経て就職をし、結婚し子育てをするという社会の一般的ルートとされる生き方とは異なる選択をし、アート活動をするためにアルバイトを続けるものの加齢とともに社会的なつながりが途絶え、孤立に陥るケースもある [5)]。このように、経済的にも精神的にも「生活してゆく」ということの困難さを痛感しながら生きてゆかねばならない傾向にある。それにも関わらず、労働市場には、「自立しろ」「ちゃんと働け」「社会の役に立て」というマジョリティ思想が広がっており、このダブルバインド状態がアーティストとして社会で生きてゆくことの生きづらさを生み出していたと言える。

一方で、アート業界で生きてゆくこと自体が困難である状況も見逃せない。なぜならそこにも強固

なシステムが存在しており、知名度の高い展覧会やギャラリーにいかに「選ばれる」か、市場でいかに高値で取引されるかがアーティストとして生きてゆくための至上の課題となっているのである[白川 2005]。このようにアート界で「成功」するためには、消費者が喜ぶような、洗練された、金になる作品を作らなければならず、多くのアーティストは作品制作だけでは食べてゆけないという状況にある。

しかしながら、このような表現に関わる欲求と、それが承認されにくいシステムとが同時に存在している矛盾状態から生まれる「生きづらさ」が、次のステージへと移行するための力にもなっていた。上田はこの社会で表現者として生きていく自身の弱さを自覚するなかで、表現が社会とどのように関わることができるのかを問い始めるのだった。

［上田］ずっと私は、社会が怖かったの、自分の知らないところで粛々と社会が進んでいくことが怖かった。誰が何を決めてるのか。どこに何を思って生きていったら良いのかわからなかった・・・でも、私もその中に参加していたいって思ったんです。・・・仕事はしてたんですよ、もちろん。社会人なんですけど、何をしても不安で、何をしたら合ってるのか、自分が間違ってるんじゃないかとか、肯定もできなかった。不安でしょうがなかった。お給料ももらってるんだけれど、それもなんかすごい居心地が悪い、でもそれでもお金をつかうことは好きなわけですよ。本当にバランスの悪い、考え方というか、生き方しか出来てなかった。

②社会と関われる手法を模索

詩人としてイベントやワークショップを開催してゆくなかで、詩を仕事として成り立たせる、つまり社会と具体的に関わっていくにはどうすべきかを考えていった。そして、作品を生み出すことを目的とするのではなく、社会と関わり、ネットワークへの参加の手法としてアートにできることは何かを模索し始める。こうして詩を仕事として生きていくことを決意し、詩人ではなく「詩業家宣言」とした。

（2）FG での日々：アートの力を問うていた（2003 年～）

【課題の対象化】

①目の前のニーズに気づいていく

2003 年からは、大阪市の文化行政が立ち上げた、経営破たんした都市型遊園地・FG のテナントの空き店舗を活用した「新世界アーツパーク事業」に参加するかたちで活動をしていた。「この場を色んな人に活用してもらおう」と、喫茶店営業をしながら舞台スペースの運営管理をしてゆくなかで、関わる人々と時間を共有していく。そこで交わされる「ささやかなおしゃべり」という互いに表現し合う行為を通して、例えば、ニートや障がいを持つ人、社会で働くことの困難さを抱えている人々、アーティスト志望で就職しない・出来ないという悩みを抱えた人たちのニーズに出会っていった。

②目の前の現実（ニーズ）とそれを生み出す社会の関連を学ぶ

同時に、釜ヶ崎から訪れる人々との出会いの中でホームレスや日雇い労働者の問題を学んでいく。これらの出会いを通じて、それぞれの社会的なニーズの存在に気づいていくと共に、それが個人的な問題から発生している自己責任の課題ではなく、社会的な問題であるということも学んでいった。

［上田］釜ヶ崎の問題を自分なりにリサーチ、勉強していく中で、あ、近代化っていうものがもたらしたものなんだなーと。その近代化になって、快適になっていく暮らしを享受してきたのはほかでもない自分自身である、ということに気づき、釜ヶ崎の問題をちゃんと考えな、考えたいな、取り組みたいな、と思ったんですよね。でも、アプローチがわからなくって・・・どうしたらいいんやろって。

このことは決して他人事ではなく、これらの社会的な問題が引き起こされる背景に自分自身も加担しているという気付きであったと同時に、また社会に関わることの難しさを実感しているアーティストの一人として、自分たち自身の問題としても切実な課題だった。このような出会いを通して、「私と社会」という関係が、「私たちと社会」という認識へ、さらには「私たちを含む社会」「社会をつくる私たち」といった、自分たちと社会の関わり方を模索する意識へと転換していったと言える。このように、生きづらさ自体が社会の仕組みによって引き起こされ、しかしその社会に参加しているのは自分自身であるという矛盾した状態に気付くことによって、自分自身の生きづらさ自体が対象化されていったと考えられる。

このことが、その後、社会および個人が矛盾した存在であることを前提としながら関わり続けるという態度を生み、オルタナティブだが、理想郷のような全く別次元の場作りではない方法で、目の前の課題に向き合っていくという実践を展開させていくことにつながっていったと言えるだろう。

【態度決定へ】

③表現の力を学ぶ

一方で、表現が他者のニーズに気付くためのツールであるというだけではないことが、おしゃべりの経験の中で分かってくる。ささやかな表現であっても人を元気にする力があるということだ。そしてこのような表現の持つエンパワメントの力を、場作りや就労支援など具体的な事業へと展開させていった。例えば、就労支援事業では、社会体験・ワークショップ・トークサロンなどを実施するなかで、「プレゼン能力とかにつながっていくもっともっと前の段階の、自分を肯定する力とか、受容する力」といった[上田 2007：95]就労という形で社会と関わりを持つ以前の「生きる能動性」を支える力が表現にはあるということを学んでいく。表出し合い、受け入れ合い、聴き合い、応答し合うなかで、思いがけない声に出会う。こうして、アートは自己・他者と出会い直せる場を生むということがわかってきた。

④どんな他者でいるか：支援者ではなく

このような表現に出会う実践を進めるなかで、他者と出会い関わることの豊かさを知っていくと共に、自分たちが他者にとってどんな他者でいるかという立場性を自覚していくことになる。困難を抱えた人々と関わっていく機会が多く、彼らのエンパワメントを支えるアートを追求していたことは事実だが、ココルームの立場として「支援者」であるという認識はなかった[上田 2008：31]。むしろ、硬直した「支援-被支援」関係から互いに解放されてゆくような関わり方として、互いに善き他者であることを心がけていたのである。「支援されるべきあなた」という社会的に規定された被支援者と、その受動的な存在である被支援者を「支援しなければいけない私」という専門分化し決めつけられた関係から出発するのではない。主体性を発揮しながら生きている存在として他者を眼差し、確かな関わりを続ける中で互いを知っていくという態度、初めから「決めつけない」姿勢を得ていく[上田 2012：59]。

⑤省察からミッションを獲得していく

このように、これまでのアートの枠組みを越えて、自らの問いをニーズを持っている他者と共に深めてきたものの、自分たちの活動をどのように名付けたら良いのか分からない状態にあった。それと同時に 2005 年、行政より FG からの退去命令を下され、活動の場を失う危機に立たされたが、これらのことが実践自体を省察せざるを得ない状況を生んだのであった。他実践との協働を通して、対話と省察の場を多く設ける中で、自分たちの実践を振り返り、アートはどのように人々や社会と関わることができたのか、その中で自分たちの実践としてどのような態度を表明してきたのかを振り返る。そこで確信を得たものを自分たちのミッションとして再確認した。それは「アートと社会の際（境界）でどちらも往来すること。行き来し、耳を澄まし、悩み考え、知恵をあつめ、言葉にし、態度とする。」という方向性であった[上田 2008：32]。

（３）釜ヶ崎での日々：多様な他者と交通する場づくり（2008 年～）

１）現実に即して揺れる・・・【戦術を獲得してゆく】

①関わる人の多様性を大事に～素人のプロとして～

［上田］アート系の人たちは離れていったんですが、そこからは逆にアートとは関係のない人たちが関わるようになったんですね。研究者の人とか、サラリーマンを辞めた人だとか。主婦の人だとか、本当にいろいろ。・・・しかも、おっちゃんの方も色んな人たちが色んなようにやってくるようになって・・・ふらーっとやってきて・・・　なぜかここが窓口みたくなってる。「どうしよー」って来るから、追い返すわけには行かないでしょ。だから、「どうされたんですかー」って。そういう人たちのしんどいことをとにかく聞いて、私たち何の専門性もないから、釜ヶ崎のいろんな NPO につないで、並走することしかできないなと思って。

アーティスト主体から「素人性」を持った主体へと、共に実践を進めていく仲間が変化する。専門性ではなく、個としての多様性を活かし、目の前に現れる課題を抱えた人に対して、共に問題を解決してゆく姿勢を確立していく。このように「素人のプロ[6]」として自分たちの方法を創り上げていった。

②店のふりをして

ココルームは、店として「サービスを受ける側（客）−提供する側（ココルーム）」という当たり前の関係性から、意識的に外れていこうとする。「客」として訪れる人であっても、皿洗いや掃除をする。物理的に人手が足りないという理由も大きいのだが、「参加型」を標榜することで硬直した関係性を揺るがそうとしている。

また、「営業する店」は金を支払うことでサービスを受けることが通常だが、金銭的に余裕のない人が無銭でお茶を飲んだり、ただ何もせずに居るということが許容されている。それは、表現の場として居場所化していくことが実践のミッションでもあるためだが、その「常識」と外れた振る舞いは、周囲の営業店から異質な眼差しを受け、「真面目に商売しろ」と批判されることにもなる[上田 2012:58]。それでも、現実に即して常に揺れている状態を心がけている。なぜならそのことが、「個として関わる」ことを支えるからである。通常、カフェを重視するのであれば、客に配慮した利用のしやすさ・入りやすさ、客どうしのプライバシーや距離感を保つような空間づくりなどが目指されるだろうが、インフォショップ・カフェ ココルームはそれらとは真逆の要素から成り立ち、入り口の周辺はチラシや多くの情報、様々な色彩で溢れ、入店をためらってしまう雰囲気があり、内部もスッキリしているとは決して言えないような空間が広がっている。自分たちの活動を説明する際、「カフェのふりをしながら」と述べているのは、カフェを運営することが目的ではなく、あくまでもミッションを意識してのことだ。

③場の意味をめぐって

しかし、このような店としての振る舞いは、ココルームという場の意味を巡って対立を生じさせ、組織内部の調整をせざるをえない事態にもつながった。

［上田］カフェのスタッフはとっても頑張ってくれたんだけど、ほんだら、頑張りすぎて、良い店に、と思ったんですね。良い店にするってことは、やっかいなお客さんはもう来んでいいってことなんですよね。だんだんココルームのミッションとずれてくるんですよね。・・・ちょっと大変だったんですけれど、1 か月ほどかけて理事とかも動員して、スタッフのヒアリングに入ってもらって情報をとりまとめ、もっかいミッションを確認したの。ココルームでカフェをやった経験から、自分のやりたいことがはっきりしてきて、店やりたいなっていう夢を持ったってことなので、それ

はそれで素晴らしいことなので、卒業しようと。卒業してくださいと、いうことで、カフェスタッフは、みんな退職されて。

関わる人々の多様性は、ニーズの多様性でもあるが、その多様性を担保出来るような調整は容易ではなく、ミッションとズレた要求を受け入れることが難しいほど、運営を支える組織側には余裕がなかったと言える。また、個性の強いおじさんたちからの依存を受けて、釜ヶ崎を離れざるをえなくなったスタッフもおり、釜ヶ崎特有の課題の多さ・複雑さをミッションだけで支えていくことは難しいという事実もある［上田 2012：59］。

④ 関係をめぐって

日常の中で持続的な関係を保っていこうとすると、自身の言いたい言葉とは異なる態度をとらざるを得ない。

［U］長くいる関係を続けるためにどうすればいいかっていうのをまず考えるようにしてて。今日そんなに話を聞かなくても、今度細切れに聞くとか。そのために今、嫌だと思ったことは言うとか。じゃないと私がいられなくなるっていう風なことはすごい気にしてやってて。・・・性格上では、普通にすごいありがとうって言いたくなるんだけど、それがすごい微妙で。最初はわけわかんなくて。すごいありがとうって言いたかったけど、それがエスカレートしていっちゃって、私に対する依存みたいになっちゃうな、と。

自身の意志や「非決定」というミッションを自覚しながらも、矛盾した振る舞いを意図的にしているのは、態度・方法を確立していかないと自分自身が保てないためだ。

こうやって、あえて際に居座り、「ひそかなたくらみ」をしながら揺れ続けるという「戦術」として「なんとかやって」ゆこうとしていたのだった。ここで言う「戦術」とは、システムに裂け目をつくり、「境界を横断」してゆくような「日常的な」技を実践してゆくことを意味している[Certeau 1987]。

2）バランスを支えるアート

① 表現の力は、矛盾をまるごと捉えることでもある

ココルームは毎日、小さなイベントをして場を開くことを心がけている。たとえば、詩・俳句・習字・絵を描く・・・などであるが、そのイベントの準備のための周辺の作業（看板に色を塗る、片付けるなど）さえもが人々の表現の力を支え、他者に対する配慮や気遣いを育んでいた[原田 2011：20]。

一方で、全ての表現が人を前向きにさせるわけでもない。実践の拠点である釜ヶ崎のように課題が集積しサポート体制も追いつかない場ではなおさら混沌とした状況がある。

ココルームに鉄パイプもった酔っ払いが乗り込んできた場面に居合わせたこともあったし・・・いろんなことが起こる。[仮屋崎 2011：71]

このようなさまざまな価値観が混じり合った状況はココルームにも日常的に持ち込まれる。ただこの地域では、名前や肩書きを含めてあえて個人の出自やプライベートに干渉しすぎないという配慮がなされ、矛盾したままで存在はしていても意識的に通い合わせないことがある。しかしアートの場では、複数性をもった矛盾した声や多様性や異質性が共存し全体性を築いていくことも多い。

T さんの言葉のトゲにハラハラしたし、しばしば嫌悪もした。・・・（それから姿を見せなくなり、）『表現』の最終回から４日後・・・T さんが来た。・・・T さんの中にはどんな気持ちが行き交って、来ることをやめ、また足を運んだのだろう。・・・言うことは、いつかと同じ。・・・変化した行動と変わらない言葉との間を、沈黙の背にあるものを、想像する。嫌悪が少し和らぐ。12 週目の表現を、僕は心して受け取った。[茂木 2013：29]

アートにはアートの作法のなかで、混沌状態に一定の形式を与える（モヤモヤを形にする）という力があり、その多声性・矛盾は顕在化し際立ってしまうことがある。

名前とひと言ぐらいしか言うことのなかった M さんは、笑顔を見せながらこの場に参加している気持ちを言葉に。当たり障りないことを言うようにしているように見えた O さんが、踏み込んだ想いを口にしたり、他の方に反論する場面も。トゲのある発言が多かった T さんは、人との距離のとり方を考えさせられるこの場を貴重に思っている、と話してくれた。[茂木 2013：8]

しかしそこで、互いの声に出会い、温かさ、悦び、違和感、憤り、励ましなどを交換することを通して、矛盾にまみれ複数性を持った存在として他者を捉えるということが学ばれていると考えられる。

② 関係を支える

他者との関係を担保する際の本心に反した振る舞いをしなければいけない苦しさは、アートによって和らぐことがあった。

［U］なにか表現とかしてくれたものを見たら、普段「やっぱりこのおじさんこういう風だよな」って思ってたものが揺れたりとか、すごい嬉しい気持ちになったりとか、ニヤッとしたりとか、うわ！これ作っちゃったって思ったり。・・・こういう活動してることで色んな人が来てくれて、たとえば、学生さんと話してる常連さんの言葉っていうのが、慣れちゃった私では聞けないようなことをしゃべってたりとかすることがあって。それはやっぱりこういうのないと出来ないって思いますね。・・・私は基本的にはイベントとか大きいことやるのはあんまり得意じゃないし好きじゃないんですけど、段取りとか出来ないし。そんなことよりは、毎日ここ開けてるってことが良いかなって

思ったりするんですけど、でもやっぱりイベントとか終わった時とかって、これ日常のためにこれ開いたんだなって思って。そういう時の、みんなめっちゃかっこいいっていう瞬間がないと、日常を続けられないっていうのはすごいある。

アートは、関わる人の力を引き出すもの。新たな自分に出会い、新たに他者に出会い直す。アートに支えられているのは、スタッフ自身も同じである。

③ 運営を支える

また、省察の手法としてアートを活かすこともある。事業成果報告のプレゼンテーションをする際に、活動の課題を川柳でまとめた。

［U］何が課題だろうって言って、それをパワポにしたんだけど。そのまま分析しようと思ったらすごい辛かったから、みんなで川柳にしたんですよ。困ってること川柳。・・・・普通にさ、課題とか言われて書こうと思ったら怖くて書けない。怖いし、面倒だし書けないって思うけど、これ川柳にしたら書けたから。これも表現の１つだなって。・・・・別にしんどいことだけをしんどいですって言いたいわけじゃなくて、それでも面白いからやってるって言いたいわけじゃないですか。そんなしんどいんだったら辞めろよっていう話になっちゃうんだったら嫌だから、できるだけ楽しくやりたいって思って。

実践を振り返り､他者の眼差しと交えることで実践を省察的に捉え直すことを大事にしているが、組織や地域の抱える課題自体がとても苦しいことではあるため､｢現実のしんどさ｣に飲み込まれてしまいそうになる。しかし、アートはそれらの運営を支える配慮の技術でもあった。

こうやって、ミッションと現実が対立する場合、ミッションを遂行してゆく大変さという運営における現実的な課題が、アートの力で支えられていたことが実践の特徴であり、問いの深まる解放の実践が進んでいくポイントでもあると言えるだろう。

④ 表現の前の安心の場づくりが重要

しかし、「表現する」という行為の前段階には、自己の存在が受け止められているという安心の局面が重要であるという気付きがあった。

［上田］そんなもん恥ずかしいから嫌だとか、あんこ[7)]やから、ほんなもんするかーって　ずっと嫌だって言いながらも、でもライブがあるのを見たり、習字してるの見たり、絵描いてるの見たり、とかしてたわけですよね。ほんで色んな人が出入りして、ここでは、いわゆる玄人じゃない女性が、おっちゃんたちの話も聞くし、学生も来るし・・・日常的にこの場がそういう場があったんですよね。で、何か変わりたいかなっていうものの芽が、おっちゃんたちの中から芽生えてきた・・・ここでの信頼関係、ココルームっていうことの馴染みがあったからこそ、禁酒禁煙のメディアセンタ

ーに行って、表現活動をするっていうか、その居場所化にするってことができたんですよ。ここでやっかいなことを起こしてたおっちゃんたちが、ちゃんと行ける居場所としてちょうど 2008 年、1 年以上の関係があったからこそ、こっちにスライドできた。

その場にいることが受容されること、つまり社会的に場違いとされている声さえも含めてありのままの状態を受容されることは、自己の存在を肯定されているという自覚を生む。こうして安心を得ることではじめて、他者に自身を表現するという行為が可能となる。表現の先にはそれを受け止める他者がいることが大事だが、それ以前に、存在そのものを否定されずに受け止められる局面が大切であった。

６．結論

本稿の課題は、地域社会と関わっていくアート実践が解放的に展開されていくプロセスを確認し、第一に、実践の展開論理を明らかにすることであること、つまりは「アートが社会と関わるにはどうすべきか」という問いにどのように応えていった実践だったのかその過程を論じることである。第二に、そのような実践プロセスが成立する条件を解明し、地域の日常／システムとアートが関係を築いてゆく際の態度や実践のあり方に関して示唆する点を述べたい。

（１）解放のプロセス

「解放のプロセス」とは、実践を通して問いが深まっていくプロセスであった。初めは、「役立たずな詩人はどう生きていったらいいのか」「どうしたら社会と関われるのか」という漠然とした大きな不安を伴った問いであった。・・・【矛盾状態：システムに取り込まれる生きづらさ】

それが、具体的な他者との関わり、しかもアーティストという同じ立場の他者だけでなく、ニート、フリーター、障がい者など、人や社会と関わることに困難を抱えた「異質な他者」［宮崎 2007：63］との関わりによって、問いが具体化してゆく。そして、異質な他者でありながらも、現代社会で生きるという課題を共有する者として、その課題に共に取り組んでいった。・・・【課題の対象化】

このようにして、具体的な課題に取り組むことで問いを深めていき、確かなものを掴むことで生まれるさらなる問いに応えていくという循環を実践として展開していった。・・・【戦術を学ぶ：あえて際で揺れるという選択】

当初、「役立たずな自分」という存在基盤が揺らいでいた状態から、他者とともに基盤を作ること、さらに具体的な実践を積み重ねてゆき、確かなものを築き上げていくことで、自分たちの自信を固めていった。実践を通して、矛盾した自己・他者を表現し合い、受け入れ合い、応答し合う場（機会）がつくられていくと同時に、それらを可能としたアートの力を学んでいったのである。それはアートは何ができるのかと不信感を持っていた状態から抜け出すことであり、アートが社会と関われなかった行き詰まりの状態から解放されることであった。

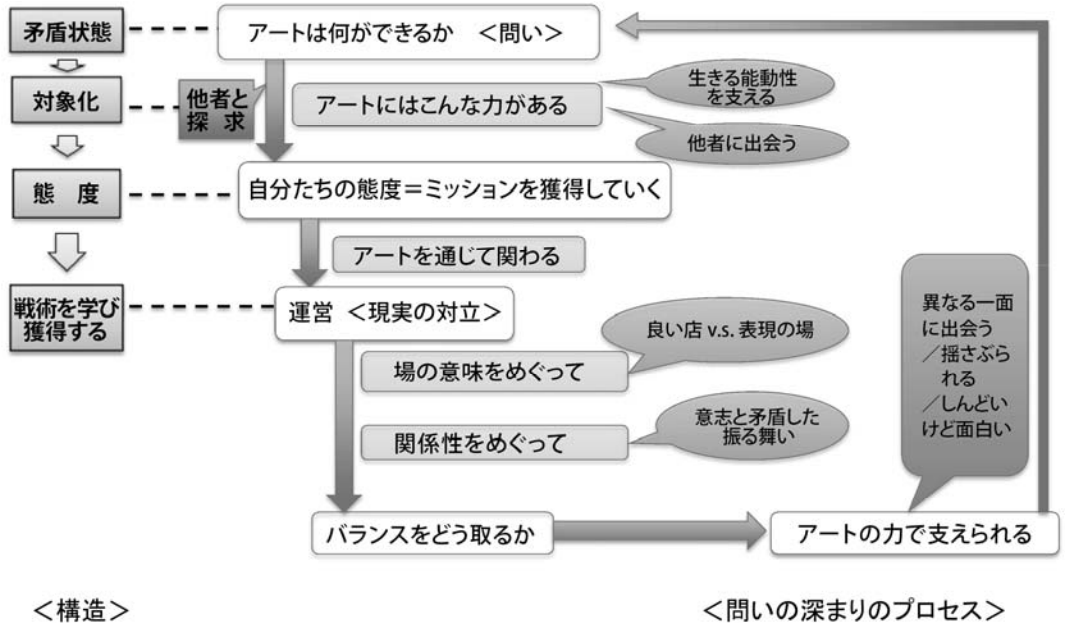

図１　解放のプロセス

（２）「解放のプロセス」を支えた条件

また、このような解放の場づくりを支えたものとは、次の点であると考えられる。

１）共に問いを深め合える他者の存在

一人で行き詰まりを抱えたままでなく、共に問いを探求できる他者がいることが重要であった。自分たちの弱さの自覚が他者との共同探求を必要とし、独りよがりにならないようにと開かれた場づくりをすることを通して、さらに異質な他者とのつながりを生み続けていた。その中で、他者の力を借りることで自分たちが支えられ、自分たちの力が他者を支えるという関係を育んでいった。このような異質な者どうしの出会いが、多声的な場を育てるのだった。

２）アート観の深まり

共に探求する他者に出会うことのできるアートの力を丁寧に見つめ、掬い上げてきたことが、アート観を変容させていった。アートは、世界の現実を暴くという力を持ち、既存のアートの枠組みであれば、それが作品として結晶化され、美術館や虚構の世界の中で暴かれることで際立つとされてきた。しかし、本実践を通じて学ばれたアートとはそれだけでなく、応答し合うことを通して、他者や自己と出会い直し､それが生きていく能動性を支える力になるというものであった｡そして、アートはこのような力（性質）を媒介にしながら、社会の具体的な何か（人や物事）と具体的に関

わる技術でもあった。それは、目の前の現実で起こっていること・表現されているものを問うだけではなく、それらを交わらせ確かな関わりを生む場・時間をつくる、つまり、アートの技術を場づくりに活かす営み（実践）そのものもアートであるということであった。

３）実践としての態度

問うてきたなかで、自分たちや他者にとって大事なことを態度（ミッション）として実践してきた。その態度とは、はじめから決めつけない、多声性、矛盾状態を当たり前として受け入れる、揺れること、間にいること、他者とともに並走していくこと、「たえず、機会をうかがう」こと・・・など[Certeau 1987：26]。これらはアートという表現し合う場における態度であったと同時に、日常の運営の場面を含む実践そのものの態度であったといえる。

４）バランスをとる技術としてのアート性

関係性や場の意味をめぐって行き詰まりが生じた際、それを揺さぶりそのバランスを支えるのがアートの力でもあった。自身の振る舞い方を定め、「この人はこうだ」「どうせ変わらないだろう」という決めつけが生む硬直的な関係性は、アートの場面で思いがけない他者に出会った時に解放されてゆく。むしろ、他者も自己も、決めるつけることができない複数性をもった、互いに矛盾した存在であることを学んでいく。

また、場の意味を巡っては、「カフェのふり」をしたり空間としての怪しさを担保する、つまり「日常の当たり前」に揺さぶりをかけるというアート性を保持することで、他者と出会える場をひらき、出会える機会を増やすという実践の態度が保たれていた。

ここでは、アートを生み出すこと自体が目的ではなかった。非日常がないと行き詰まってしまうほどの日常の切実さがあり､その現実を生きていくことを支えるものとしてアートは存在している。本実践は、日常から出発し、アートを経てまた日常に戻っていくことをトータルに支える営みであったと言える。

（３）おわりに

以上のように、社会と関わっていくアート実践は、すぐに出現するようなものではなく、生成し展開してゆく過程それ自体が重要であった。課題やミッションが先行した操作的な実践ではなく、何が生まれるのか問いながら、まずはやってみること。大義名分に呑まれず、目の前で起こっていることを丁寧に捉え、応答すること。アーティストはそのことを十分に知っているし、それを仕事としているが、共に探求する他者と学び合い、共にプロセスを創っていくことこそが重要であるということがわかった。

しかし、実践として展開していく際の現実的な課題である、持続的な経営や担い手側の生活の保

障に関する議論については不十分であったため、今後はより踏み込んだ分析を行いたい。

また、本稿はアート側の行き詰まりに注目して分析を行ったため、地域側の解放のプロセスにはふれることができなかった。両者の行き詰まりからの解放のプロセスを探求することで、地域社会と関わるアート実践の解放の論理を明らかにすることを明らかにしてゆくことを今後の課題としたい。

注

1)「プロジェクト」という言葉には、「問題解決」や「大きな計画」という意味が含まれているが、今回扱う対象は、その「問題」自体を探すところから模索する試みであるため、「アートプロジェクト」ではなく「アート実践」と表記している。
2)例えば、[藤ら 2012]を参照。
3)カフェ・ココルームの真向かいにある、表現をすることを主な目的として作られた「カマン！メディアセンター」のこと。通称「カマメ」。
4)2012 年から始められた事業。「不安定な日々をすごす」釜ヶ崎のおじさんたちの生活リズムに合わせて、「集中的な日程」で、ココルーム以外にも場を広げながら、音楽・ダンス・合唱・詩などの様々な表現を展開。[植田 2013：1]を参照。
5)例えば、「第四章　フォーラム『就労支援とアートの伸びやかな関係』／ディスカッション：エンパワメントするアートの可能性～専門と非専門のむすび方を考える」『アートによる包摂型就労支援の可能性／就労支援カフェ BAND ココルーム 2006 事業報告書』NPO 法人ココルーム（2007：97）を参照。
6)2012 年 8 月：上田へのインタビュー など
7)「日雇い労働者の蔑称。あるいは自嘲として用いられる。海底でぢっとしているアンコウに似て、路上に佇み仕事をまっていることに由来。」(「覚えておきたい！釜ヶ崎用語解説集」『アートと地域：社会実験としての小さな公共圏生成へ カマン!メディアセンター 2009-2010』（2011：85）を参照。)

＜参考文献＞

ありむら潜, 2011, 「表現せずにはいられない街、釜ヶ崎」『アートと地域：社会実験としての小さな公共圏生成へ / カマン！メディアセンター 2009 - 2010』大阪市立大学都市研究プラザ
上田假奈代, 2007,「第四章 フォーラム『就労支援とアートの伸びやかな関係』　事例報告：ゆるやかな場づくり～アート NPO ココルームの取り組み」『アートによる包摂型就労支援の可能性／就労支援カフェ BAND ココルーム 2006 事業報告書』NPO 法人ココルーム
上田假奈代, 2008, 「こころにたねをもつこと～アートと社会の関わりの可能性をさぐる～」『こころのたねとして～記憶と社会をつなぐアートプロジェクト～』ココルーム文庫
上田假奈代, 2012,「OCA! 2009-2011 まとめ:コミュニティアート、社会へ開かれていく創造性」『OCA! 2009-2011 報告書 OCA! 大阪コミュニティアート -2009 アートの力を信じる／2010 まだ問いつづけている／2011 あきらめなくて悪いわね- 決めつけないこと 時間を信じること ほがらかでいること-』現代芸術創造支援事業 OCA! 大阪コミュニティアート
上田假奈代・植田裕子, 2014, 「釜ヶ崎芸術大学、ふたたび開校」『釜ヶ崎芸術大学 2013 報告書』NPO 法人こえとことばとこころの部屋（ココルーム）
植田裕子, 2013, 「釜ヶ崎芸術大学、開校」『釜ヶ崎芸術大学 2012 REPORT』NPO 法人ココルーム
Yrjo Engestrom, 1987, Learing By Expanding, An activity-theoretical approach to development research （＝山住勝広・松下佳代他訳, 1999, 『拡張による学習：活動理論からのアプローチ』新曜社）
仮屋崎健, 2011, 「四畳半レジデンス・プロジェクト レポート#02」『アートと地域：社会実験としての小さ

な公共圏生成へ / カマン！メディアセンター 2009 - 2010』大阪市立大学都市研究プラザ
白川昌生，2005，『美術・マイノリティ・実践－もうひとつの公共圏を求めて』水声社
Michel de Certeau, 1980, L'Invention du Quotidien. Vol. 1, Arts de Faire, Union générale d'éditions.(= 山田登世子訳，1987，『日常的実践のポイエティーク』国文社 ）
原田麻以，2011，「カマン!メンディアセンター　まいにち を生きる」『アートと地域：社会実験としての小さな公共圏生成へ / カマン！メディアセンター 2009 - 2010』大阪市立大学都市研究プラザ
藤浩志・AAF ネットワーク，2012，『地域を変えるソフトパワー：アートプロジェクトがつなぐ人の知恵、まちの経験』青幻舎
宮崎隆志，2007，「成人学習論における記録分析の課題と方法-生活記録を手がかりに―」『日本社会教育学会紀要』第 45 号，日本社会教育学会
茂木秀之，2013，「クラスは続くよ：『表現』の時間を振り返って」『釜ヶ崎芸術大学 2012 REPORT』NPO 法人ココルーム
茂木秀之，2013，「釜ヶ崎芸術大学のあゆみ　表現．４」『釜ヶ崎芸術大学 2012 REPORT』NPO 法人ココルーム
鷲田清一，2012，『語りきれないこと―危機と傷みの哲学』角川学芸出版